

沖縄県宮鉄道那覇駅跡



旭橋都市再開発株 駄場秀夫氏作成模型

沖縄県営鉄道那覇駅跡調査概要

(1) はじめに

平成27年12月から平成28年4月にかけて発掘調査を行った「沖縄県営鉄道那覇駅跡」について紹介します。沖縄県営鉄道那覇駅跡は那覇市泉崎1丁目20に所在し、現在工事中の那覇バスターミナルの敷地内に立地します。発掘調査はモノレール旭橋駅周辺地区第一種市街地再開発事業に伴うもので、工事中に発見された転車台（1号遺構）と車両点検ピットと推定される遺構（2・3号遺構）を対象に実施されました。これらの遺構は沖縄本島で大正3年から昭和20年まで「ケービン」と呼ばれ親しまれていた軽便鉄道に関連するものです。

(2) 遺跡の概要

沖縄県営鉄道那覇駅は、明治終わり頃の埋立地である現在の泉崎にて1914年（大正3）に開業しました。赤瓦葺き木造平屋建ての駅舎には売店もあり、西側には鉄道管理所や交番が置かれました。北側には転車台・機関庫・修車庫・石炭置場等が設けられました。しかし施設の大部分は1944年（昭和19）10月10日の空襲により焼失、翌年には戦争の激化により鉄道は運行を停止しました。戦後、那覇駅跡地には1959年（昭和34）に那覇バスターミナルが開設されました。

那覇バスターミナルの敷地内にある『仲島の大石』は、埋め立て前の古地図にも描かれ、県指定史跡として当時と同じ位置に残っています。

(3) 発掘調査の概要

1号遺構は那覇バスターミナルの敷地内西端、2・3号遺構は敷地内のほぼ中央で発見されました。遺跡の層序は、Ⅰ層（戦後のバスターミナルに伴う造成土）、Ⅱ層（那覇駅に伴う造成土）、Ⅲ層（明治終わり頃の埋立

土）、Ⅳ層（埋立て以前）の4つに分けられます。

1号遺構（転車台）

転車台は機関車の向きを回転する施設で、沖縄の軽便鉄道駅において唯一、那覇駅に設置されました。発見された転車台は、機関車を載せる部分は失われていますが、土台部分全体の約8割が残っていました。規模は直径6.8mの円形のレンガ製で、高さはコンクリート基礎からレンガ上部まで最大1.1mあります。転車台はレンガ積みとコンクリート基礎の本体部分、中央に位置する回転軸から構成され、これらの中には3列に並ぶ直径18cmの木杭と様々なサイズの根固め石が確認されました。

レンガ積みは2段構造になっています。1段目は幅約0.95mの4段積みで、2段目は幅約0.5m、最も残りの良い箇所では5段積みですが、当時の写真から本来は13段程あったと推測されます。1段目には円形のレールを固定していたと思われる2列の鉄筋が確認されています。レンガの積み方はイギリス積みと呼ばれる、長手の段と小口の段を交互に配置し、縦方向の目地が一直線に並ばないようにして強度を出す方法が用いられています。レンガのサイズは長さ22~24cm、幅11~11.5cm、高さ5.8~6cmと若干のばらつきがあり、目地の厚さも一定ではなく、転車台の形状や水平を保つためモルタルで調整していたと考えられます。

コンクリート基礎は幅1.3~1.5m、高さ0.2~0.4mで、回転軸を中心にドーナツ状に設置されています。外側は多角形状となっていますが、内側は円形になるよう整形している様子が窺えます。コンクリートの骨材には約5cmの石灰岩碎石や海砂を使用していると考えられます。また、南側のコンクリート基礎には

直径12cm、厚さ約1cmの陶管が埋め込まれており、排水溝であると考えられます。

コンクリート製の回転軸は東側を破損していますが、高さ0.5m、一片1.4mの正方形であったと思われます。中心部は約0.6m四方でくり抜かれ、中央に位置する木杭跡の周囲4箇所では金属が埋め込まれた痕跡を確認できました。

2号遺構・3号遺構

2号遺構と3号遺構は1号遺構の東側約75mに所在します。2号遺構は長軸8.26m、短軸1.65m、最大高0.75m、3号遺構は長軸8.5m、短軸1.6m、最大高0.85mです。いずれも平面形状は長方形で、断面形状は凹状を呈しています。遺構の上部は欠損しているため詳細は不明ですが、レンガ積み・コンクリート基礎・根固め石・木杭の構成は1号遺構と同じです。両遺構の配置関係は直列に並ばず、2号遺構からみて3号遺構は北東へ約2.4m離れて位置しています。

2号遺構は最大5段、3号遺構では最大6段のレンガ積みが残っています。レンガの積み方は1号遺構と同じイギリス積みです。レンガ積み外側は階段状になっており、2号遺構では1箇所、3号遺構では2箇所の段差が認められます。

レンガ積み内側のコンクリートの床面には、集水口と思われる、直径14cmの陶管が埋め込まれた穴を1箇所ずつ確認できました。床面は穴に向かって緩やかに傾斜しています。陶管はコンクリート基礎内を通り、遺構の外面に続いているため、排水溝と考えられます。2号遺構の排水口は陶管の方向から一部損壊した北西短軸側にあったと推測されます。3号遺構の排水口は北東長軸側で検出されました。

コンクリート基礎は高さ約0.4mで、壁面と

四隅角に残る木片や長軸方向に等間隔で並ぶ細い木杭跡は基礎を造る際の型枠の跡と考えられます。

木杭は両遺構のレンガ積みのほぼ真下で、各40本確認されました。木杭の配列には、長軸方向に一行に並ばないような一定の規則性が認められます。2号遺構から回収したほぼ完形の木杭は、直径約15cm、長さ約3.5mです。木杭の上端は約15cmを一回り細く加工し、先端は尖らせています。木杭の検出状況から、木杭の上端部はおおよそ根固め石の上面と同じ高さであることが分かりました。

出土遺物

今回の調査では、青磁、本土産磁器、沖縄産陶器、円盤状製品、鉄製品、獣骨類や貝類、木製品など様々な種類の遺物が出土しています。遺構に伴う遺物は、レールと枕木を固定する犬釘や陶管です。ほかに、2・3号遺構では刻印のあるレンガが確認されました。刻印は直径1.2cmの円内に1～3本の線を刻んだものです。また、遺構とは直接関係のない沖縄産無釉陶器が多く出土しています。それらの中には、いわゆる窯クソが付着したものや焼成時に失敗し製品とならなかったもの、窯道具、窯壁など窯業に関連する遺物が含まれます。

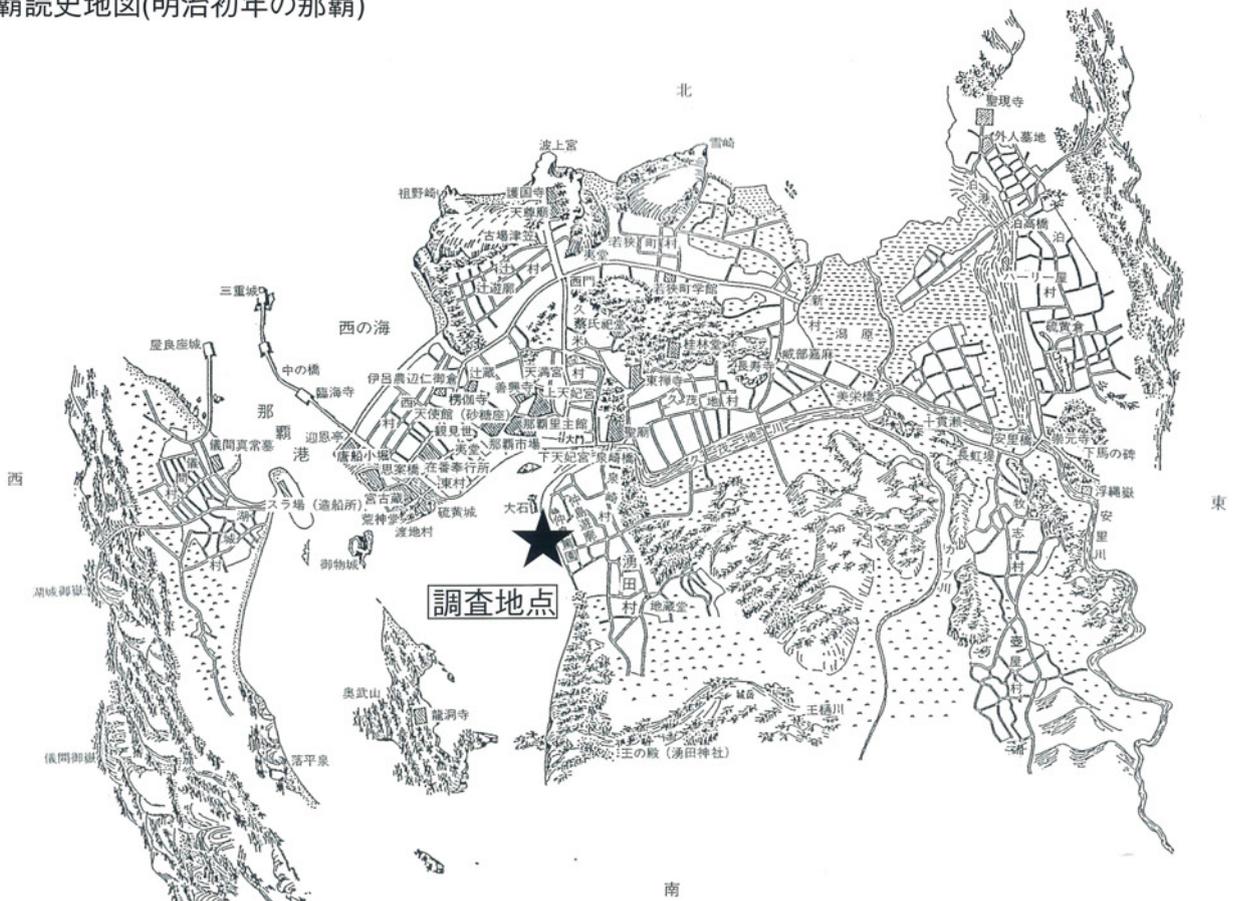
(3) おわりに

以上、沖縄県営鉄道那覇駅跡の概要について紹介しました。2016年3月26・27日には一般市民対象の現地見学会を開催し、見学者は約300名訪れました。1号遺構（転車台）は、近代沖縄の交通・産業の歴史を理解する重要な遺構として、保存活用されることとなりました。

調査地点位置図 (S=1:10,000)



那覇読史地図(明治初年の那覇)

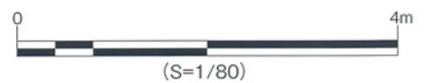
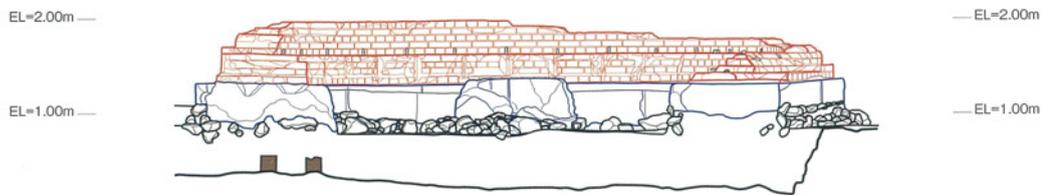


(嘉手納宗徳氏の那覇読史地図を改編)

1号遺構（転車台）平面図

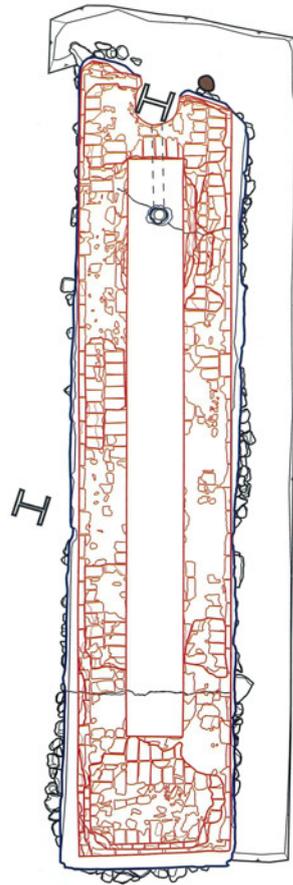


1号遺構（転車台）見通し断面図



2号・3号遺構 平面図

2号遺構



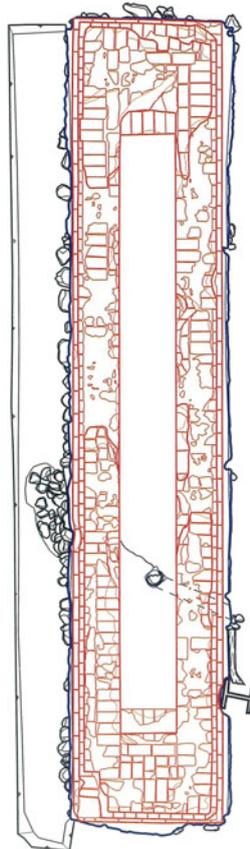
Y=17660
X=23410

Y=17660
X=23420



X=23420
Y=17670

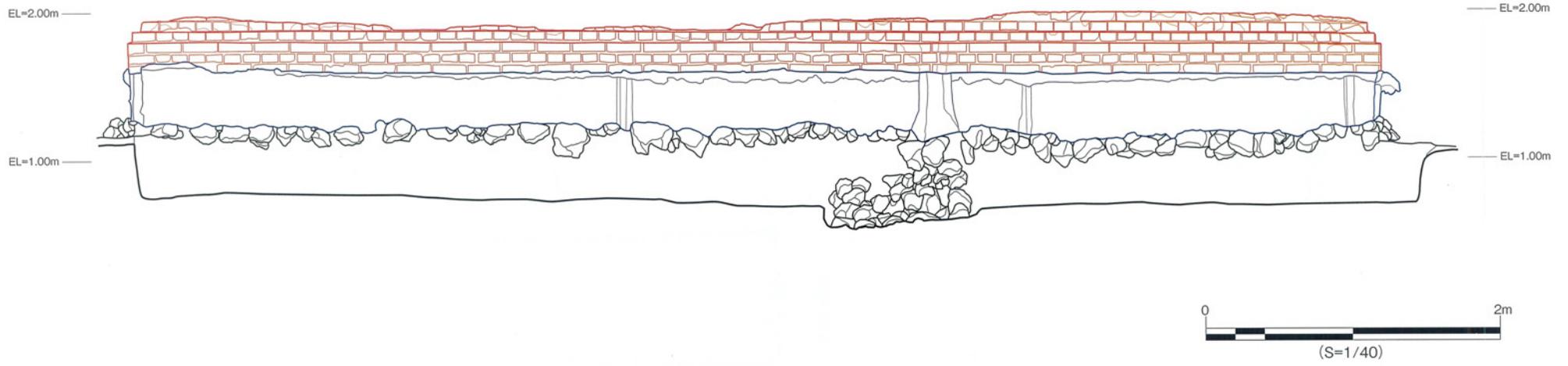
3号遺構



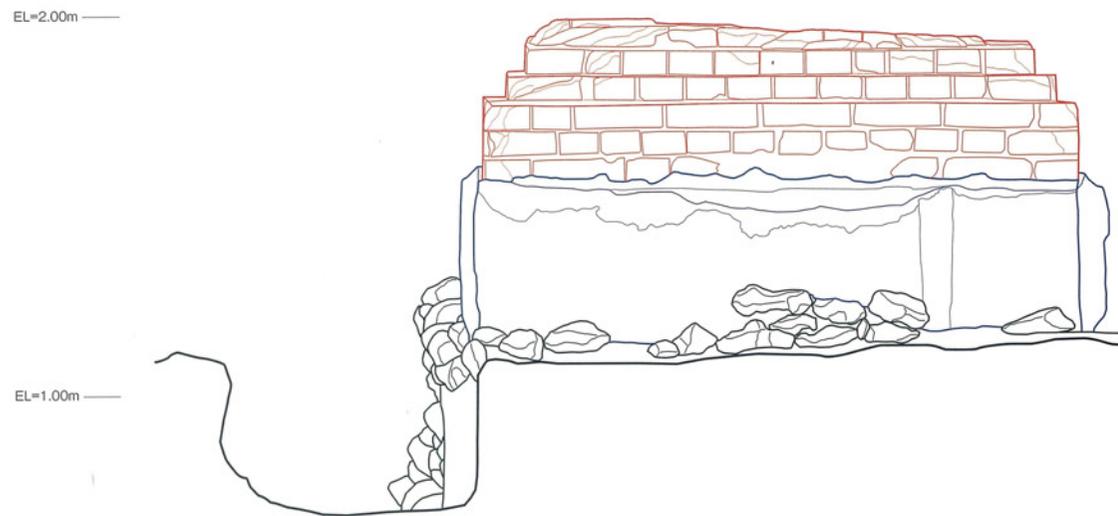
Y=17670
X=23410



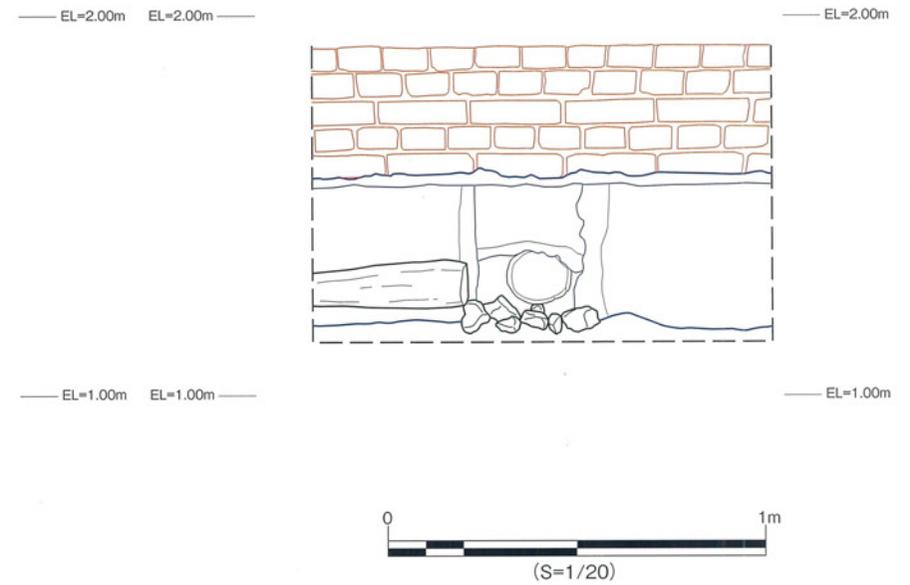
3号遺構 立面図①



3号遺構 立面図②



3号遺構 立面図③(陶管排水口)





調査地遠景 南西より
左手にモノレール旭橋駅がみえる。



調査地遠景 南西より
中央やや左に見える緑地帯は『仲島の大石』。



調査地遠景 南より
2・3号遺構は工事中の敷地内中央に位置する。



転車台（俯瞰）北西より
ドーナツ状のコンクリート基礎とレンガ積み、中央には回転軸。



転車台（俯瞰）北西より
レンガ積みは2段構造になっている。



回転軸（俯瞰）西より
中央の木杭跡の周囲4箇所金属が取り付けられた跡。



回転軸 東より
手前側に4本の木杭跡がみえる。



排水溝（陶管）北より
手前側は三角形の屋根が付いている。



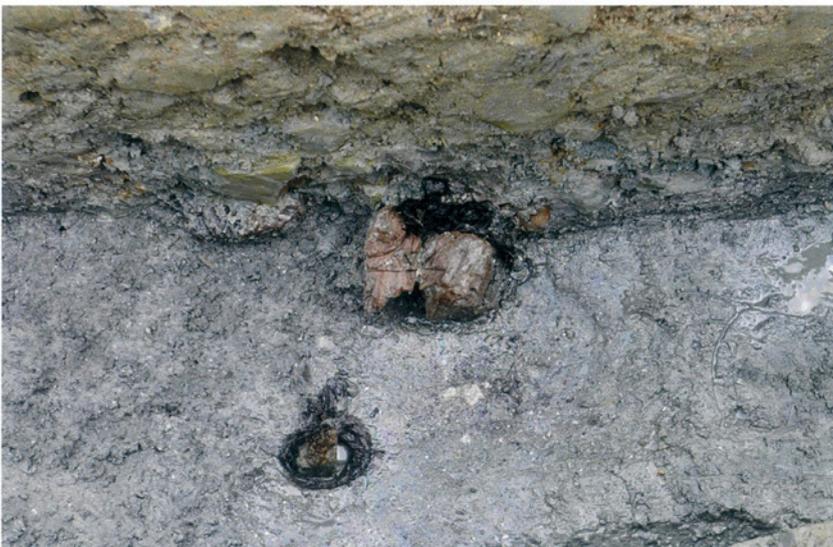
排水溝（陶管）西より
レンガ積み基礎下の陶管はコンクリートで覆われている。



掘り方検出状況 西より
コンクリート基礎の外側に幅約40cmの落ち込みを確認する。



木杭検出状況 西より
8本の木杭を検出する。



撚縄・木製品（IV層）出土状況 南より
手前の角杭は撚縄が巻かれている状態で検出される。



2・3号遺構調査前 南より
手前が3号遺構。



2・3号遺構全景 東より
手前が3号遺構。



2号遺構 南西より
コンクリート基礎の上にレンガを積んでいる。



3号遺構全景 南東より
レンガが階段状に積まれている。



3号遺構内側 南東より
短軸側に段差が設けられ、手前に陶管が埋め込まれた集水口がみえる。



2号遺構集水口 南東より
集水口へ水が集まり易いようにモルタルで勾配をつけている。



3号遺構排水口 北東より
コンクリート基礎より数cm出ている。木材は型枠？



2号遺構コンクリート基礎に残る杭痕（北西角隅） 南より



2号遺構木杭 北東より
一定の規則性を持って打ち込まれている。



3号遺構トレンチ内検出石組遺構 南より
那覇駅に関連するものかは不明。



2・3号遺構調査完了（遠景） 南より
遺構解体後の調査地。



2号遺構から回収した木杭
長さ3.5mで、上端が細く加工されている。



人力掘削作業



三次元レーザー測量



現地見学会



犬釘（1号遺構）



刻印付きレンガ（2号遺構）



陶管（3号遺構）



中国産青磁



本土産磁器



沖縄産陶器